

教育委員会会議の概要（6月定例会）

- ◆ 日 時 平成 26 年 6 月 27 日（金曜日）午後 2 時 00 分
- ◆ 場 所 教育局第一会議室
- ◆ 出席委員 委員長 永広 昌之
委員長職務代理者 油井 由美子
委員 宮腰 英一
委員 草刈 美香子
委員 今野 克二
委員（教育長） 上田 昌孝

◆ 会議の概要

- 1 開 会 午後 2 時 00 分
- 2 前回定例会会議録承認
- 3 会議録署名委員の指名
- 4 付 議 事 項

第 1 1 号議案 教育委員会事務分掌規則の一部改正について

（総務課長 説明）

原案のとおり決定

委員長

泉岳少年自然の家に代わって新たに開館される泉岳自然ふれあい館が指定管理者制度になることに伴う規則の改正であり、特に問題はないと思う。

規則の改正は特に問題ないが、従来は、生涯学習部で泉岳少年自然の家に社会教育主事を配置して、さまざまな計画に関わっていたが、今後は指定管理者制度ということで、その部分がやや間接的になる。そうした点で学習上の行事に支障を来さないよう、従来にも増して密接な協議をしていただきたい。

5 報 告 事 項

（1） 学校職員による交通死亡事故について

（教職員課長 報告）

口頭で報告

[主な質疑]

委員長

事故は公務中だったのか、それとも公務外だったのか。

教職員課長

中学校総合体育大会の業務に当たるため、自宅から中学校体育連盟の事務局である鶴が丘中学校に向かう途中の事故であり、公務の一環である。

委員

この先生は学級担任や部活動の顧問を担当していたか。

教職員課長

学年主任であり、担任ではなかったが、テニス部の顧問をしていた。吉成中学校では、学年主任の代行を置き、またテニス部の顧問についてもその後の対応をきちんと行い、子どもたちが通常の教育活動を進められるようにしている。

委員

生徒たちに、不安が広がったりしていないか。

教職員課長

事故の翌日、校長から生徒にお詫びと事情説明を行ったところ、顧問をしていたテニス部の女子生徒たちに動揺が見られたようだが、その生徒たちに対しては、それぞれの学年主任が対応するとともに、担任が家庭とも連携を取りながらケアを行ったところ、現在は、その生徒たちも落ちついているということである。

委員

中総体当日の事故ということだが、テニス部の生徒たちは試合に出場することはできたのか。

教職員課長

事故の報告を受けてすぐ、テニス部の生徒を別の教員が引率するように対応し、通常どおり中総体に参加することができた。

委員長

この件については、まだ事故の原因等について調査中ということなので、いろいろな事実が明らかになった段階で適時報告をいただきたい。

(2) 「生徒指導用名簿」の写しの紛失について

(教育指導課長 報告)

資料に基づき報告

[主な質疑]

委員

名前を覚えるために生徒指導用名簿を個別に先生が持っているということは、一般的にあるのか。

教育指導課長

ケース・バイ・ケースである。たまたまこの教員は、それを持っていたというものである。

委員長

今回の事案に係る対応として、生徒指導用名簿等に関する適切な取り扱いの徹底を行っているということだが、今回の場合は不適切ということになるのか。

教育指導課長

今回の場合、校庭での体育の授業中に使用しているものであるため、不適切とすることは難しい。ただし、個人情報に記載されているものに関しては、可能な限り教員の管理下に置くということが求められるが、今回は手の届かないところに置いていたということであり、その点が不適切だと考えている。

委員

顔と名前を覚えるために、自宅に持ち帰るということは難しいのか。以前は、自宅に持って帰って覚えた先生も多いと思うが、いかがか。

学校教育部長

今回の名簿は生徒指導用名簿であり、A4一枚に生徒の名前と顔写真、部活動名が記載されているものである。この教員は、4月に異動してきたばかりであったため、体育の時間に生徒の名前と顔を確認するために、その写しをとって指導に当たっていた。きちんと自分の管理下に置くという状態であれば問題はなかったが、ファイルにクリップ止めして置いていたため、強風によりそれがばらばらに舞い上がって飛散してしまったものであり、管理の点で問題があったと考えている。こうした名簿を自宅に持ち帰るというように、本来学校にあるべきものを校外に持ち出す場合、必要

最小限のもので、なおかつ校長の許可を得ることを条件にしている。許可を得た場合においても、常に管理下に置くこととしている。過去には、帰宅途中に自家用車に置いたまま買い物をし、その際、車上荒らしに遭って個人情報を紛失したということもあった。そうしたことも踏まえ、個人情報を校外に持ち出す時には、必ず校長の許可を得て、なおかつ自宅に直帰するよう、指導を徹底しているところである。

委員

全市立学校の校長、園長宛てに個人情報の管理について徹底するよう指示したということだが、未回収のものを発見した場合には、すぐに教育委員会に届けるようあわせて指示しているのか。学校教育部長

まだ5枚が未回収であるが、すでに回収したもので、名取川を越えて飛んでいっているものもあり、かなり広範囲にわたって飛散した可能性がある。今回この事案が発生した際、直ちに学校に対して警察に届けるよう指示をしている。教員が自力で捜せる範囲を徹底的に捜すと同時に、保護者にはお詫びをし、捜索への協力を文書で依頼した。各学校には、この事実を知らせているとともに、個人情報の取り扱いの徹底を指示している。未回収のものを発見して回収した場合には連絡するようとの指示はしていないが、まだ未回収のものがあることを知らせているので、万が一発見した場合には、教育委員会ないしは中田中学校に連絡があるものと考えている。

委員

先生が早く名前を覚えることは、教育上非常にメリットがあると思うし、生徒のやる気にもつながることだと思う。確かに個人情報の管理は重要なことなのだが、それによって先生方が生徒の名前と顔を覚えようとする意欲が失われることのないような配慮もぜひお願いしたい。先生方は大変努力をしていると思うので、そうした意欲が少しでも削がれることのないようにしていただきたい。

委員

対応として、適切な取り扱いの徹底を行っているということであるが、他の教科の先生は自分の管理下に置いておくことは可能だと思うが、体育の先生の場合には、他の教科の先生に比べると、それが難しいことが多いと思うので、そうした場合の対応方法の具体例を先生方に示していただきたい。

委員長

この件について、お二人の委員から要望があったので、それを踏まえた上で今後の対応をとっていただきたい。

(3) 平成26年度仙台市標準学力検査、仙台市生活・学習状況調査結果の概要について

(学びの連携推進室長 報告)

資料に基づき報告

[主な質疑]

委員

新聞等で発表されたスマートフォンを長時間使用すると成績にかなり大きな影響があるというデータは、この調査を基にしたものか。

学びの連携推進室長

そのとおりである。

委員

全国初の調査分析であり、すごいことであるが、今後その分析をどのように活かしていくのか。

学びの連携推進室長

スマートフォンと学力の関係については、昨年度、東北大学と一緒に研究した結果であり、スマートフォンを長時間使うことで学力の定着が弱まるということが明らかになっている。今年度は新たな質問項目も加えたので、今後その結果を詳細に調べていく。スマートフォンの適正な使用については学校だけでは解決できない問題であり、PTA協議会や家庭とも連携を図りながら、スマー

トフォンの適正な使用も呼びかけるよう努めてまいりたい。

委員

両者は全く関係ないようなデータだが、大きな関係があると思う。脳は、覚えたものを睡眠している間に繰り返して自分の情報を整理することがあるようである。寝るときまで勉強して、寝る直前にスマートフォンを使うと、せっかく勉強した内容が整理されない可能性がある。そうしたところを全国で最初に分析し、仙台市で新たな取り組みをしていただきたい。

学びの連携推進室長

新たに「どのようなときに使っているか」という質問を設けたところ、中学校3年生では就寝前に36.8%の生徒がスマートフォンなどでメールのやりとりをしているという結果であった。また、睡眠時間の関係などの質問項目等も加えており、それらと学力の関係について研究を進め、その結果をあらためて報告したい。

学校教育部長

スマートフォンやインターネットと学力の関係は、東北大学の加齢医学研究所の川島先生と共同で、学習意欲の科学研究に関するプロジェクトを行っている。その研究において、昨年度、スマートフォンと学力には相関関係があるという分析結果が出たことから、それをすぐに子どもたちに知らせる必要があるということで、12月に川島先生と共同で緊急の記者発表をし、まず受験を控えている中学3年生にお知らせをしようということで全中学校に分析結果を配布した。昨年度末から今年度初めにかけては、PTA協議会と連携を図って、パンフレットを作成し、各学校に配布したものである。今回の調査では、さらに、いじめの発生や仲間外れなど、問題発生の原因になっているLINEなどの無料通信アプリの使用状況や、睡眠との相関関係がどうかを分析するための質問項目を加えた。子どもたちはメッセージが来たらすぐ返さないと仲間外れにされるというような意識も高いという報道もされていることから、そうした実態についても調査しているところである。これらについては、川島先生をはじめ東北大学の専門的な先生方と一緒に研究し、学校に対する指導等も含め、さまざまな対応を考えてまいりたい。

委員長

本日の報告は概要だが、詳細に検討する過程で、睡眠時間や予習・復習の状況、成績との相関まで含めて分析するということか。

学校教育部長

そのとおりである。

委員

各教科の目標値については、どのような考え方で設定しているのか。例えば中学校3年生の社会について、応用力の表現の目標値を30%としているが、この目標値は平均正答率と考えてよいか。実際の平均正答率をみると30.7%となっているが、元々の目標値が30%というのは、作題する方に問題があるのではないか。通常の中学校の定期テストでは、6割から7割程度の平均正答率にするとと思うが、今回の標準学力検査の目標値は各教科によって、また分野によって、かなり変動しているが、これはどのように理解すればよいか。

学びの連携推進室長

目標値の設定の仕方については、問題を作成する業者が、事前に3,000人規模の他県の市町村でのプレテストの結果を基に、問題ごとの平均点を出し、その平均点から分野別あるいは教科の全体の平均点を出している。目標値が低いところはあるが、基礎的な知識については中学校では6割から7割、小学校では7割から8割程度に設定している。応用力のところは、記述式などの場合には難しい問題があり、若干低くなっている。ただ、教育委員会で事前に問題を確認し、あまりにも難しい問題の場合には無解答率が増えるため、補正している。応用力の問題数自体が2割程度と少ないこともあり、数字にばらつきが出ている。全国の学力状況調査においても、応用力のB問題については4割程度の正答率というところもあり、これについては今後、問題の難易度あるいは適否について、さらに検討してまいりたい。

委員

応用力の問題については、3割から4割という目標値として、学力測定を行うということか。

学びの連携推進室長

目標値が30%というのは、低過ぎると考えており、応用力でも4割以上、概ね5割程度の正答率が望ましいと考えている。事前に問題を確認し、記述式などで正答率が低くなると思われる場合には、業者に指示をしている。昨年度より応用力については若干改善しているが、改善の余地はまだあると考えており、来年度に向けて、さらに改善をしてみたい。

委員

すでに各小中学校には、調査結果の概要は配布されているのか。

学びの連携推進室長

学校には配布している。

委員

各学校では、クラス担任や各教科の担当教員が、一人一人の児童生徒に対して、この結果を踏まえて学習指導や生活指導に活用しているのか。また、三者面談など進路指導の際にも使われているのか伺いたい。

学びの連携推進室長

一人一人の結果については、学校で子どもや保護者に結果を伝え、フォローアップや指導などで活用している。中学校では進路指導をするが、標準学力検査結果については、進路指導や進学希望先とは関連させていない。三者面談では、生徒の弱点や頑張してほしい部分ということで、学校から話をするが、直接高校入試の進路指導には使っていない。

委員

標準学力検査の目的として3つ掲げられているが、生徒あるいは保護者には事前に周知しているのか。

学びの連携推進室長

お知らせしている。

委員

模擬テストの結果が学校の進路指導に使われるということが、いいのかどうかという問題がある。児童生徒の学習状況あるいは生活状況の調査なので、児童生徒のライフスタイル全体を考えていかないと、テストのためのテストのような形になり、悪循環になってしまう。この結果を先生方のご指導にも十分に活かしていただきたいという部分もあるが、この結果をすべて信じてしまっ、学校に予備校が入ってきたような形になっては問題だと思う。

学びの連携推進室長

学力検査の目的は、前年度までの学習の定着状況を知り、指導に役立てる、また、児童生徒や保護者に現状を知っていただくというものである。成績や進路指導に結びつける目的でやっているものではない。テストのためのテストというのではなく、あくまでも子どもたちの学習の定着状況に主眼を置いたテストの実施に努めていきたい。

委員

この結果によって先生の授業が拘束されると、先生方の専門性が揺らいでしまい、塾や予備校と同じようになってしまう。先生方の専門性が侵害されては、この学力検査自体の目的も達成できないことになる。児童生徒、保護者、先生方の3者の関係の中で、この結果に一喜一憂したりすることのないように実施していただきたい。

学校教育部長

標準学力検査については、あくまでも学習状況を把握するための一つの方法であると私も理解している。ただ、これは全市一斉に行っているもので、これを有効活用していくことは非常に大事なことだと考えている。委託業者からは、生徒一人一人に対してどういう定着状況なのか、どの観点か弱いかといった個票が学校に送られ、それを各学校から児童生徒や保護者に配ることになっている。その際、今年度からは、各学校でもきちんと分析し、学校としての授業改善や家庭と連携した取り組みで家庭にお願いをする部分なども含めた改善の方策を示すこととしている。

学校だけでは学力、よりよい生活習慣の定着は難しい部分があるので、それぞれの学校において今回の結果をしっかりと分析しながら、保護者の方とその内容を共有しながら連携して対応に当たっていくことが大事だと思っている。そういった観点で今後も進めてまいりたい。

委員長

これからいろいろ精査される際に、私から3点ほど要望がある。1点目は、報告事項(3)の資料3ページに、理科の「観察・実験の技能」という観点があり、小学校4年生、6年生の平均正答率が極めて低く、6ページ・7ページの内容別正答率を見ると、「昆虫の育ち方」や「植物の発芽と成長」の部分が特に低くなっている。ここ数年、科学実験は、実験の改善でいろいろ取り組まれており、そういう部分は改善されていると思うが、そちらに時間をとられて、植物・動物の観察の実験の部分が、もしかすると少し時間が少なくなっているのではないか。こういうものは、実際の観察をやらないとどうしても身につかないものなので、そのあたりを、もう少し解析していただき、理科の実験を含めた授業等をどう改善していくかについても検討していただきたい。

2点目は、同じ資料の10ページ以降に正答率が目標値と同等以上の児童生徒の割合の推移がある。今回、中学校3年生の国語については、正答率が目標値と同等以上の生徒の割合が8割を超え、先ほどの説明の中では授業改善が進んできた結果ではないかとのことであった。一方、中学校3年生の数学、小学校6年生の算数については、ここ数年ずっと横ばいで、なかなか目標値に届いていない。また、小学校6年生の国語については、大きく落ち込んでいる。その理由はなぜかというのが結構大きな問題ではないか。もちろん、これは作題が毎年変わるので、難易度の影響があるかもしれないが、小学校6年生の国語については明らかな結果になっていて、何らかの原因があると思うので、分析していただきたい。

3点目は、同じ資料の11ページの一番下にある、中学校2年生の同一集団による推移のグラフを見ると、小学校2年生からずっと算数、数学の正答率が落ちている。確かに算数、数学は積み上げが大事な教科なので、理解が乏しいままに学年が上がると、だんだん正答率が落ちてくる。これは他の教科も大なり小なり同じことだと思うが、今回、中学校1年生から2年生にかけて改善が見られた。この傾向は12ページの中学校3年生のグラフをよく見ると、小学校6年ぐらいまでずっと落ちてきたのが、中学校へ入って横ばいしないし一部改善されている。この原因は何かというのは結構大事であり、中学校に入ってから授業指導で、何か優れたところがあると思う。これももちろんばらつきがあるが、単なるばらつきでもないような気がするので、このあたりの精査をじっくりとやっていただきたい。

委員

報告事項(3)の資料23ページの65番の「人が困っている時は、進んで助けている」という質問に対して、80%以上の児童生徒が該当しており、非常に素晴らしいと思うが、その次の66番の「自分には良いところがあると思う」という質問については、中学校3年生になるにつれてとだんだん少なくなってきた、60%程度になっている。学習意欲の項目では、「頑張っているねとほめられた」というような質問があって、とてもいいなと感じたが、例えば65番の質問の後に、何かをして人からほめられたり感謝をされたりしたことがあるというような質問があると、自分にもそういうことがあったなと気づいて、66番の質問の数値も上がるのではないか。質問の中でいろいろ子供に訴えかけようとしていることがとても感じられる調査になっているので、今後はぜひそういったことも含めて考えていただきたい。

委員

先日、内閣府から、子ども・若者白書が公表されたが、その中で日本の子どもたちや若者は、欧米先進諸国に比べて、自分に自信を持っていない、将来的にも余り夢を持ってない、希望を持ってないというような結果であった。確かにそういう実態があると思われ、学力検査での単なる1点、2点の点数差の問題ではなく、かなり根深い問題だと考えている。この質問においても、こういうときに感謝されたから自信につながったとか、自分の存在感が他の人に伝わって、自分もやはり役に立っているという達成感を持ったとか、そういったポジティブな質問が次に来ると、この質問が生きてくると思うので、質問項目についても再度検討していただきたい。

委員長

この学習状況調査で1点気になっているのが、報告事項(3)の資料16ページの23番の質問で、「悪い点数をとると、友達からばかにされたり、家の人からしかられたりする」とあり、特に中学校2年生、3年生になると大幅に増えている。これはおそらく受験があるからだと思うが、教育上はあまりいいことではないと思うので、家庭も含めて広い意味で教育していくということも考えなければいけない。こういうことがそのまま続くと、いい結果は出ないと思う。

委員

報告事項(3)の資料16ページの21番の「良い点数をとると、友達や家族から『頭がいいね』と言われることがある」という質問、それから22番の「『がんばって勉強しているね』と言われることがある」という質問がある。これは、子どもたちのどういったことを知るための質問なのか、教えていただきたい。

学びの連携推進室長

東北大学の加齢医学研究所と共同で行っている学習意欲のプロジェクトの中で、先生方の中からこういうような設問で学力との相関をとり、ほめられるといったことが学習意欲にどうつながっていくかを詳細に調べたいということで追加したものである。これについては、この質問がいいかどうかということも含めて、今後の分析の中で検討してまいりたい。

委員長

今回の報告はまだ概要であり、これから8月にかけて、分析していただくことになっているが、各委員からさまざまなご意見があったので、それを参考に精査していただき、また貴重な資料なので、これを今後の授業改善等にぜひ活かしていただきたい。

6 その他

事務局 次回定例教育委員会は7月30日(水)に開催する予定である。

7 閉 会 午後3時18分